

ホッブズとアメリカ憲法体制の起源

吉 田 達 志

人文社会教室

(1987年9月5日受理)

Hobbes and the Genesis of the American Constitutional System

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities

(Received September 5, 1987)

George Mace says in his work *Locke, Hobbes, and the Federalist Papers—an Essay on the Genesis of the American Political Heritage* that, 'In so far as our political heritage may be termed Lockean or Hobbesian, we are certainly more Hobbesian than Lockean. Our political system is not characterized by Locke's unchecked majority rule. Moreover, if the majority is checked it is by the prerogative of a monarch. Such a check constitutes a "will independent of society", which is not part of our heritage. Nor are the ends of our society restricted to the protection of life, liberty, and estate. Locke's "property" is too narrow a category, being only part of a larger, more inclusive end, happiness. And happiness is the end of Hobbes's thought'.

The aim of this paper is to portray Hobbes as the primary basis of the American political heritage and Publius as the genesis of that heritage according to Mace's insistence.

1. 序

アメリカの政治的伝統については、その伝統を様々な解釈したり、しばしば対立する解釈をくだしたりすることが、繰り返されてきた。そして今や到る所で、とりわけ「人権」と「財産権」が対立するような場合、「生得権」を評価する試みが継続して行われている。そこで我々の自然権を含めて、基本的な政治的価値と政治構造に焦点を合わせて、その伝統を検証したい。これが、『ロック、ホッブズ、フェデラリスト——アメリカの政治的伝統の起源』¹⁾を著したジョージ・メイスの目的なのである。こうした目的を達成しようという意図から、彼はロック (Locke) とホッブズ (Hobbes) の理論を原典に沿って綿密に分析し、更に両者を『フェデラリスト』²⁾におけるパブリウス (Publius) の理論と比較検討していった。その結果、彼は「我々の政治的伝統をロック的と呼ぶか、それともホッブズ的と呼ぶか、そのいずれを取るかといえ、我々はロック的国民というよりも、間違いなくホッブズの国民と呼ぶことができる」³⁾という、通説とは異なる結論に到達したのであった。

この小論の目的は、メイスの所説を以下に追跡することによって、アメリカの政治的伝統の起源に対して新しい照明をあてようとする点にある。

メイスによれば、西洋の政治哲学には二つの伝統がある。一つは自然法学派であり、もう一つは自然権学派である。そしてアメリカの政治的伝統は、まぎれもなく自然権学派の伝統に属するのである。《アメリカ独立宣言》は自然権説の宝庫である。

「我々は、自明の真理としてすべての人は平等に造られ、造物主によって一定の不可譲の権利を付与され、そのなかに生命、自由および幸福の追求の含まれることを信ずる。また、これらの権利を確保するために人類の間に政府が組織されること、そしてその正当な権力は被治者の同意に由来するものであることを信ずる。そしていかなる形態の政府といえども、もしこれらの目的を毀損するものとなった場合には、人民はそれを改廃し、彼等の安全と幸福をもたらしと認められる主義を基礎とし、また、そのような権限の機構をもつ新たな政府を組織する権利を有することを信ずる。」

不可譲の権利とは、放棄させたり、取り上げたりすることのできない権利のことである。これらの権利は、諸個人が行動の自由をもつ領域を構成し、それはまた同時に政府を制限する領域となる。《宣言》に従えば、この領域には生命、自由および幸福の追求の権利が含まれる。従って、もし不可譲の権利というものが存在しなければならぬとすると、これらの諸権利に対する権利が存在しなければならぬということになる。さもなければ、

これらの諸権利は本当の不可譲の権利にはなりえないであろう。《宣言》がここで述べているのは、人々が生命、自由および幸福の追求の権利に対する権利をもっているということである。《宣言》の言葉から明らかなのは、政府の基礎をこうした原理に基づかせなければならないこと、そして国民の「安全と幸福」を最もよく実現するであろうと思われる形態に、政府の権力を組織しなければならないことである。これらは「自明の」真理である。

さて、ロックはこれまで長らくの間、アメリカの自然権思想の伝統に最大の影響を及ぼした政治理論家だと見なされてきた。《アメリカの建国の父たち》に与えた彼の影響が余りにも大きいので、合衆国をロック的国家と名づけることができるであろう、とほのめかす人々さえ大勢いるほどである⁴⁾。しかしながら、彼の影響の痕跡が『フェデラリスト』に見当たらないのは注意をひく。これは奇妙である。なぜなら、《憲法》の提案者たちが政府を創設するにあたって、その本質を解説しているとされる著述を一編にまとめたのが、フェデラリスト論文だからである。当時の他の文献には強いロック的調子が見られることを思えば、益々納得がいかないのである。

ロックといえば、多数者支配と自由の擁護者であり、特に生命、自由および幸福の追求という不可譲の権利の擁護者であると見なされてきた。この事情は現在も変わっていない。他方、人間の本性に関するホブズの見解は、とりまなおさず《建国の父たち》の見解である、と見なす人々が大勢いる⁵⁾。けれども彼等は、両者の類似性もそこまでだと強調する。彼等にとっては、アメリカの経験はホブズの問題に対するロック的解決策としての意味のみをもっているのである。

こうした通説に対して、メイスは次のようなことを証明しようと試みる。すなわち、ロックの政治思想を《宣言》、《憲法》および『フェデラリスト』の政治思想と比較すると、ロックの及ぼした影響力の範囲に関する伝統的見解が妥当でないこと、そしてアメリカの政治的伝統とのより強い類似性はホブズの政治思想のなかに見られること、がそれである。

ところで、《宣言》と《憲法》の性格は大いに異なっていると主張する人々がいる。彼等は、《憲法》をより民主政的な《宣言》の原理に対する保守主義的反動の所産だと見る。《宣言》は革命の文書であるのに対して、《憲法》は建設し、それによって社会を安定させようとする、というのである。《宣言》と《憲法》の性格の相違をめぐる議論から、二つの重要な結論が導き出される。

先ず第一に、もし《憲法》によって樹立された政府が混合統治形態であって、民主政治の要素を含んでいることが証明されるなら、《憲法》は少なくとも《宣言》と同程度には民主政的であると見なされねばならないであら

う。更にこの政府は生命、自由および幸福の追求の権利を涵養することに努めているし、しかも君主政治のおよび貴族政治の要素を欠いているから、《憲法》はむしろ、民主政治的な革命の産物であると見なされねばならないであろう。

第二の結論は、民主政治は自由と同義ではないということである。このことを理解するのは決定的に重要である。その理由はこうである。すなわち、ホブズは民主政治の敵であるが故に彼の思想は《宣言》の思想と同じではないと考えられるのに対して、ロックの方は民主政治の支持者であると考えられるが故に彼の思想は《宣言》の思想と同じであるように見えるからである。もしホブズが、君主政治の支持者であるにもかかわらず自由の友であると証明されるなら、彼の位置は《宣言》に近くなるであろう。また、もし自由が必ずしも民主政治に伴うとは限らないこと、換言すると、ある種の民主政治は自由とそりが合わないことが証明されるなら、ロックは依然として民主政治の支持者としてとどまるにせよ、彼を自動的に《建国の父たち》が提案したのと同種の民主政治への帰依者だと見なすことはできないであろう。

《宣言》の信念には、あらゆる形態の政治は自由に敵対する可能性があるという認識が反映している。そしてこの認識こそ、アリストテレスの「政治の原理に関する著書」の影響を物語っているのである。アリストテレスは『政治学』のなかで、善悪二種類の政治が存在すると論じている。すなわち、すべての人々の利益を目指す政治と、ある特定の社会階級の利益を目指す政治が、それである。第一の型には王政、貴族政、国政という三形態がある。第二の型の三形態（僭主政、寡頭政、民主政）は、第一の型に属する諸形態を逸脱したものである。よい国家構造と逸脱した国家構造との峻別は、政治が全体の人々の利益を目指しているか、あるいは人々のうちの少数部分、つまり支配者の利益だけに限定されているかを目安にしてなされる。従って、悪い民主政治（アリストテレスはこれを民主政と呼んだ）は多数の人々の利益のみを追求し、悪い貴族政治（寡頭政）は少数の人々の利益を追求し、そして悪い君主政治（僭主政）は私的利益を追求する一人支配を意味していた⁶⁾。

ジェファソンと当時の一般的通念がこの区別に同調したことには、ほとんど疑い余地がない。ジョージ三世が暴君であることをはっきりと示す数々の所業のなかで、先ず最初に挙げられているのは、「彼が公共の福祉のために最も適正、かつ必要な法律の裁可を拒んだ」こと、および彼が「広大な地域の人民のための施策を規定する他の法律を制定するのを拒んだ」ことである。この王政の定義、つまり社会から独立して自らの私的利益を追求する意志という定義には、アリストテレスの影響が容易に

読み取れる。その上なぜ《宣言》が、いかなる形態の政治といえども生命、自由および幸福の追求の権利を涵養する可能性もあれば、それらを破壊する可能性もあるという信念を抱いているのか、その理由が一層はつきりとわかるのである。

ロックは民主政治の擁護者だと見なされている。その理由は、彼がアメリカの統治形態に似た多数者支配の形態をよしとし、更に彼がよしとした統治形態が権利を涵養する種類のものではあった、と信じられているからである。そこで我々は、《宣言》に盛り込まれた四つの真理の光に照らして、ロックの政治哲学を検討することにしよう。すなわち四つの真理とは、すべての人々は平等に造られていること、生命、自由および幸福の追求という一定の不可譲の権利を付与されていること、これらの権利を確保するために人類の間に政府が組織され、その権力は被治者の同意に由来するものであること、そしてもし政府がこれらの目的を毀損するようになった場合には、人民はそれを改廃する権利を有すること、がそれである。

2. ロ ッ ク

メイスによれば、ロックにとって民主政的論調の方が統治形態の問題よりもずっと重要であるという点に留意しなければならない、という。現代の多くのアメリカ人は、自由主義と民主政治とを同等視するようになっているために、ロックがどの程度平等主義を擁護したか、またどの程度生命、自由および幸福の追求といった一揃の不可譲の権利を擁護したかを考察することが肝要となる。こうしてメイスは、ロックの説がどのような具合に四つの「自明の」真理の観念に——つまり《宣言》の民主政的論調に——適合しているかという問題に向かっている。

第一の「自明の」真理とは、すべての人は平等に造られているという信念である。ロックは人々が「生来すべて自由であり、平等であり、独立している」と述べたけれども⁷⁾、彼はこの平等を少数の選ばれた人々が優れた能力に基づいて支配権を要求するのを退けるに足るほどのものとは見なかった。このことは二つの点から明らかである。

第一に、ロックが古典派の思想家たちと同じ人間観を抱いていたことである。彼等の主張によれば、たいいていの人々は情念に支配されているが、少数の人々には自らの情念を支配するに足る理性が備わっているとされた。これらの少数の人々とは、言うまでもなく貴族であった。従って古典派の思想家たちにとっては、貴族の理性が働いて彼自身の情念だけでなく、民衆の情念をも同様に抑制しなければならなかったのである。ロックは彼等と同

じように、多数者の情念は人間の外にある理性的なものによってのみ、すなわち執行官による大権の行使を通して抑制されうると信じた。ロックは、社会から独立したある意志、つまり多数者の意志から孤立したある意志に頼ろうとしたために、古典派の思想家たちの立場へと逆戻りしたのであった。

第二に、通例多数者支配の支持者だと見なされているロックが、寡頭政治とは「少数の選ばれた人々とその相続人や後継者に」権力が委ねられる統治形態のことだと述べて、少数のエリートの優越性を信ずると自認したことである。ロックは、こうした立場を『統治論』、第五十四節で述べている。

「私は前に第二章で、人はすべて自然状態においては平等であると述べたが、私があらゆる種類の平等を考えているとは誰も受けとるまい。年齢や徳はその人の正当な優越を認めさせるであろう。優れた才能や功績がまた、別の人を人並み以上の水準に置くこともある。ある人は素性から、また他の人は同盟や恩恵から、自然の情や感謝の念やその他の顧慮によって尊敬されてしかるべき人々に服して敬意を払うこともある。しかしこのようなことはすべて、ある者の他の者に対する制裁権や支配権という点に関して万人がもっている平等と矛盾しないのである。なぜなら、私が先にそこで問題となった事柄に固有のものとして述べた平等とは、すべての人が他人の意志や権威に服することなく、自分の生来の自由に対してもつ平等の権利のことだったからである。」

こうしてロックは、ある資質というものが存在しており、それには支配権が伴うのだ、と信じていたように思われる。従って、彼の平等の概念は《宣言》とほとんど合致しない。なぜなら前者は、少数の選ばれた人々であれ、執行官であれ、自分が優れた資質をもっていると主張し、それに基づいて支配権を要求したとしても、それを排除しないからである。

第二の「自明の」真理とは、すべての人は造物主によって一定の不可譲の権利を付与されており、そのなかには生命、自由および幸福の追求の権利が含まれるということである。これは、人々には安全と幸福の権利、およびこれらの権利に対する権利が付与されていることを意味している。これら二つの権利に関して、ロックとホブズとの相違は重要である。ホブズにとっては後に見るように、生命の権利が不可譲の権利であることは明白であるが、一方ロックにとってはすべての権利のうちで最も基本的なこの権利が、放棄されうるということもまた同様に明白である。

更にロックの言う権利は譲渡可能であるとはいえ、また、それらは生命、自由および資産に限定されるとはい

え、これらの事実だけから「近代初期の自然権の学説と二十世紀の人権の学説」⁹⁾とを二分して考えることが必要だとする今日の見解が正当化されるわけではない。例えば『所有的个人主義の政治理論』の著者、C・B・マクファーソンは、「生命、自由および資産という初期の自然権の三つ揃」と、二十世紀の「人権」概念との間には、相容れない反目が不可避的に存在することを明確に指摘することによって、こうした結論に到達したのであった⁹⁾。

しかしながら、彼が近代初期のすべての学説の言う自然権を生命、自由および資産の権利とのみ同一視することには問題がある。特にホブズの説く権利の学説に照らして見た場合にはそうである。これらの権利は単に生来のものであるにとどまらず、不可譲のものでもある。そしてまた、財産という狭い範疇に限定されないものである。「人権」の学説がホブズによって明快に説かれ、そしてそれが《宣言》のなかで巧みに展開されたことは疑いようがない。けれどもロックは人権を強調しなかった。マクファーソンが指摘したように、生命、自由および資産という自然権の学説はロックに根差しているのである。

ロックが自然権の擁護者であったことは真実である。「人間はひとたび生まれれば、自分を保全する権利をもつということ、従って肉や飲み物、更には自然が人間の生存のために与えてくれる、その他のものに対する権利をもつ」¹⁰⁾。しかし、ロックはこれらの権利がどのような言葉や行為によっても剝奪されえない、不可譲の権利であるとは明言していない。それどころか彼は、これらの権利は剝奪されうると明言した¹¹⁾。更にまた、特に彼がここで言及した権利のなかには、単なる生存の次元しか、つまり単なる生命の保全ということしか含まれていないのである。

万人は生存の次元に対して生来の権利をもっているにすぎず、ある人々だけがより多くを所有する権利をもっているのだ、とロックが主張したとする結論を裏付ける強力な証拠がある。その証拠は、彼の比例的平等の概念と彼の財産の概念の双方のなかに見られる。ロックは、単にエリート主義的な比例的平等の要求にのみ基づいて財産の不平等な所有を正当化することに満足できず、更に一步進めて、財産の不平等な所有の起源を人民の同意のなかに求めることによって別の角度から正当化しようと試みた。その結果、少数の選ばれた人々がより多くを所有することは、「財産」それ自体と人民の双方によって正当化されるに到ったのである。

ある人々は他の人々に較べてより多くの財産をもつ権利がある、とロックが主張したことにはほとんど疑問の余地はないのだが、彼の圧倒的な関心が財物の所有に

あったことにも、同じようにほとんど疑問の余地はない。この点に関して彼は、「土地の増加とそれを使用する権利とに関わるのが政府の重要な仕事である」¹²⁾、とまで強調したほどであった。他方、《宣言》のなかにはこれと対照的な考えが表明されている。そこでは、政府の重要な仕事とは幸福をもたらすことであるとされている。ロックが、人間には幸福の追求の権利があるとは決して明言していないということは、大変興味深い事実である¹³⁾。

《宣言》の第三の真理についてロックは、政府が人々の権利を保障するために設立されることによって、人々の権利と政府の目的とは完全に同じものだとされるし、しかも政府は自らの正当な権力を被治者の同意から引き出すと論じた。けれどもその政府の目的は、ロックの言う権利の学説によって決まってくるのであり、しかもその学説における権利の範囲は、《宣言》におけるそれよりもずっと狭く限定されているのである。ロックは、政府の重要な仕事は土地を増加させ、それを使用する権利を助長することにあると論じたとし、また彼は、政府の目的は生命、自由および資産を保障することにあると見た。従って彼の立場は、《宣言》のなかで明言された安全と幸福という目的を目指そうとしたのではなく、むしろ保全と安楽という目的を目指そうとしたのであった。保全はすべての人々にとって目的であるけれども、安楽はある人々にとってのみ目的であるにすぎない。こうして、財物を享受することが幸福をもたらすという限りにおいて、ロックは、政府の目的が万人にとっての安全と、ある人々にとっての幸福とを両立する点にあると語った、というのである。

《宣言》の最後の真理について、ロックは、政府が保障するはずであった目的を政府自身が毀損するようになった場合には、いつでも人民は革命を起こす権利をもつと主張した。しかしながら、ロックの学説における市民社会の目的の範囲は、《宣言》の学説における範囲よりもずっと狭いために、市民社会における権利もまた同様に、何を政府に要求することができるかという点のみならず、誰がそれを要求することができるかという点についても限定されるのである。その結果、たいていの人々が抵抗の権利をもつのは、政府が最低限ぎりぎりの生存条件を整えるのに失敗した時のみだ、ということになる。それにひきかえ、少数の人々は、政府が最低の生存を維持するのに必要な範囲を越えた彼等の資産を保護するのに失敗した時にも抵抗してよいのである。その上ロックが、人民のうちのある人々にとって立法府に抵抗する必要があると想定していたとはとても思えない。およそ社会のなかで競合する諸利益をロックがどのように見ていたかは、一人、少数の人々、それに多数の人々に関する彼の概念によって決まってくる。どうやら彼は、一人の

利益、少数の人々の利益、それに公共の利益の他には利益の種類を考えていないようである。立法は人民によってなされるのであるから、それは少数の人々と多数の人々双方の利益を追求するであろう、とロックは考えた。従って、立法府に抵抗する権利を人民のうちのある人々に与える理由はほとんどない、と彼は考えたのであった。更に興味深いのは、彼が少数の人々と多数の人々との区別をあいまいにした、そのやり方である。少数の人々の利益と多数の人々のそれが相容れないかもしれないという可能性を無視してしまったために、ロックは彼等をひとまとめにして共通の「民衆」として扱い、そしてそれを大多数の人々とか、人民とか、様々な名称で呼んだのであった。これまでに非常に多くの学者が次のように述べたのも、別に驚くにあたらない。すなわち、ロックが多数者支配と言う場合の多数者とは、市民社会における数の上での大多数の人々というよりは、むしろ重きをなす諸個人、つまり影響力をもつ諸個人のうちの大多数の人々のことであり、彼等は全体の数のうちでは少数者から構成されているのである、と。

要するに結論として言えるのは、政治理論の基本的問題を考慮に入れても、あるいは人間の本性に関する前提——ここに、そうした問題の淵源がある——を考慮に入れても、ロックの見解が《宣言》の見解に適合しているとはとても思えない、ということである。彼の論調を見る限りでは、その見解は不平等主義的、かつ反自由主義的な論拠に立っているのである。どうやら、これまでホッブズ主義と呼ばれてきたものと、同じように曲解された不正確なロック主義とが、思想史上手に手をとって進んできたように思われる。

ロックの説が、《宣言》の「民主政的」な論調に、つまり四つの「自明の」真理に適合していないのは意味深長である。しかし、ロック主義が思想上誤認され、誤解されてきたことが真実だとしても、いわゆる「悪魔的」で、「反自由主義的」とされるホッブズ主義の方が、更に一層曲解されてきたこともまた真実である。従って、ホッブズの説をより注意深く、かつ、より広範に検証する必要性が出てくるのである。

3. ホ ッ ブ ズ

メイスは、ホッブズの学説をアメリカにおける自然権の伝統の基礎をなしているものとして把握し、両者の関係を論じていった。

第一の「自明の」真理である平等について、ホッブズは再三再四のように述べた。「自然は、人間を心身の諸能力において平等に造った。すなわち時には他の人よりも明らかに肉体的に強く、あるいは機敏な精神の持主が

いるとしても、しかもなおすべてをひとまとめにして考えてみると、人間同士の間にははなはだしい差異はない。従って、ある人が差異に基づいてある利益を自分のものだとして要求したとしても、他の人もまた、彼と同様にその利益を目分のものだとして要求してよいのである」¹⁴⁾。人間は能力において本質的に平等であるから、同様に権利においても平等である。こうして、「すべての人は、等しく生まれながらに自由である」¹⁵⁾。

ホッブズはここで、プラトンとアリストテレスに向かって反論している。ホッブズの主張によれば、人間の能力の差はごくわずかであるから、誰一人として、自分が生まれつき優れているという根拠を持ち出して特別の待遇を要求することはできない。とりわけ貴族または哲人王といったエリートが、自らの優れた資質を根拠として支配しようとする要求は排除されるのである。

《アメリカ独立宣言》の一節に、「すべての人は平等に造られている」という言葉があるが、その意味をめぐって多くの見解が対立してきた。すなわち、本当にすべての人は権利において、あるいは能力において、あるいはまたその両者において平等に造られているのであろうか、と。人は権利においてのみ平等に造られうるのだという考えは、貴族または哲人王の要求を論破する上でほとんど役に立たない。というのは、たとえ権利の自然状態のもとにおいてであっても、市民社会の目的——万人の諸権利——を保障するためには、どのような種類の組織が必要であるかを最も適確に決定することができるのは、やはり最も賢い人々、最も純粋な人々、それに最も有能な人々であるという理由をつけて、自分たちが支配すべきであると彼等は主張してくるからである。権利は、市民社会という場においては能力によって正当化されるから、人間は権利と能力の双方において「平等に造られている」とホッブズが論じているのは、きわめて説得力に富んでいる。もしそうでなければ、権利における平等といってもそれは、アリストテレスが唱道した比例的平等と配分的正義を容認するような意味での法の前の平等になってしまうであろう。ともあれ、すべての人は平等に造られているという第一の真理に関する限り、ホッブズの主張は少なくとも《独立宣言》の主張と同じ程度には平等主義的なのである。

更に、ロックとホッブズが様々の統治形態にそれぞれ特有の名称を付与した際の理由づけを見ると、平等に関してはロックの考えよりもホッブズのそれの方が《独立宣言》の内容と一致していることがわかる。アリストテレスは六つの純粋統治形態が存在すると主張したが、ロックは実際には三つの純粋統治形態が存在するだけだと主張した。そしてホッブズも同じ意見であった。けれども、そのようなロックの主張の根拠は、ホッブズのそ

れとは異なっている。なぜなら、ホッブズは人間誰しも自分自身の利益を目指して支配しようとするものだと考え、それを理由として三つの純粹統治形態が存在するにすぎないと主張したからである。これに対してロックの理由づけは、人間は生まれつき不平等であるという古典的なテーマに依拠している。こうして、ロックとホッブズは統治形態についてはほぼ似たような見方をしていたが、両者それぞれの理論的根拠は著しく異なっているのである。

第二の「自明の」真理とは、人間には安全と幸福の権利と、これらの権利への権利とが与えられているということである。けれども、個人と政府との本来の関係を不可譲の権利に基づいて体系的に説明した理論家はホッブズが最初であったにもかかわらず、他ならぬこの点に関してホッブズの哲学と、彼の時代から今日に至るまでの注釈家たちがこれこそホッブズの哲学だと言っているものとの間には、きわめて大きな隔たりがある¹⁶⁾。ホッブズの見解の基礎をなしているのは、自然状態と人間の状態についての独特な捉え方である。ホッブズにとって、自然状態とは絶えざる戦争状態を意味している。そして戦争とは戦闘行為のみならず、戦闘への傾向と戦闘の可能性とが共に存在している期間をも意味する¹⁷⁾。こうした人間の不幸な境遇をもたらす原因として、二つの要素を挙げることができる。第一の要素は人間の本性であるが、より重要なのは自然状態という第二の要素であって、そのために絶えざる戦争状態に陥るのである。諸個人は、自分の力を思うように振るうことのできる完全な自由を所有している。その彼等が情念に駆られて行動すると、その結果として自然状態が発生するのである。従ってホッブズは、「人々を威圧しておく共通の権力をもたずに生活している間は、彼等は戦争と呼ばれる状態にいる」¹⁸⁾と主張したのである。

しかしながら戦争状態は、自然状態の悲惨をもたらす要因の一つにすぎない。自然状態における苦しみは、ただ暴力による死を免れるための保障が存在しないということだけにとどまらない。人間はまた、産業、文化、航海、海路による通商、建築、技術、地理学的知識、時間の計算、芸術、文学など、これらが存在しないことによっても苦しめられる。換言すると、社会制度がもたらす有益な恩恵にあずからないが故に人間の生活は孤独で、貧しく、陰険、残忍で、しかも短い。

この戦争状態を離れ、市民社会に入るために、人々は自然状態で所有していた諸権利の一部を放棄し、それらを共通の権力に、すなわち主権者に譲渡して、その見返りになんらかの利益を得ようとする。要するに平和を維持し、自らの不可譲の権利を守るために、人々は互いに相手の生命に対する権利を放棄しようとするのである。

このように、ホッブズは契約論的基礎の上に立って論じた。ところで彼はまた、実力によって支配を確立した主権者は、信約を通じて支配を確立した主権者に等しい権威を有しているものであり、従ってどちらの主権者のもとにあっても、臣民は同じ義務を負っていると考えた。そのために、ホッブズは剥き出しの実力を正当化することのみ関心を払っているのだ、と論ずるような注釈家たちが大勢現われた¹⁹⁾。けれども、彼等はホッブズの基本的、かつ圧倒的な自由主義的原理を考慮に入れてはいない。ホッブズの論理には、臣民のみならず主権者にも義務を負わせようとする狙いが込められている。

実力によって創り出されたコモンウェルスにおける自由を擁護しようとして、ホッブズは、人々が主権者に服従しなければならないのはその服従のうちにこそ自らの自由があるからだと論じた。主権の権利と職務はどちらの型のコモンウェルスにおいても同じであると主張することによって、ホッブズはそれぞれの主権者に同じ権利を付与しただけでなく、市民社会の目的（従って主権の職務も）同じものであるとした²⁰⁾。換言すると、どちらの種類の主権国家においても、主権者と臣民の双方は共にそれぞれ同じ権利と義務を有している。このことを証明するために、ホッブズは、いわゆる獲得による主権であってもそれは、同意と選択によってのみ樹立されると論じたのであった。

思想史上、ホッブズは常に絶対君主と、実力によって支配を確立した主権者との忠実な擁護者であると描かれてきた。けれどもホッブズは、人々を暴君に服従させようとして獲得による主権を正当化しようとしたのではない。それどころか反対に、暴君に義務を課そうとして、それを正当化しようとしたのは明らかである。実力によって権力を掌握している人々は、ホッブズの正当化論に基づいて生命、自由および幸福の追求といった人間の不可譲の権利を保護し、増進し、涵養するよう義務づけられることになる。臣民へのお返しとして主権者が負う義務は、それに先立ってホッブズが行った義務の基礎づけから必然的に生ずるのである。義務が存在するためには、人々が権利を絶対的な主権に譲渡する行為は自発的でなければならない。義務が自発的であるためには、人々は権利を譲渡する代わりにお返しとして、なんらかの権利または他の利益を受け取らなければならない²¹⁾。人々は主権者に服従するよう義務づけられるが、それは、人々が先ず権利を譲渡したり、あるいは放棄したりすることによって手に入れようとした目的を主権者が尊重する場合に限られる。こうしてホッブズの公式に従うなら、臣民と主権者の双方が義務を負う場合にのみ主権は市民社会に存在することができる。義務が存在しない場合には、一切は共通の主権者のいない自然態に復帰してしまうの

である。

このことは、誤って解釈されることもあったホッブズの次の言葉、すなわち、いったん樹立された主権はどんなことがあっても打倒されてはならないという言葉の意味をはっきりさせてくれる。「主権者の職務は(それが君主であれ、合議体であれ)彼がそのために主権を信託された目的、つまり人々の安全の確保にある。彼は、そのことを自然法によって義務づけられている」²²⁾と書くことによって、ホッブズは「人々の利益の確保」のために本気で取り組んだのであった。主権は、定義によって人々の利益の確保を目指すのであるから、抵抗など受けるはずがない。それを目指さないような権力は、主権ではない。

臣民の義務および自由を同じように基礎づけるために、ホッブズは「臣民の真の自由の細目、すなわち彼が主権者に命じられたからといって、行うのを拒否しても不正ではない事柄とは何か」²³⁾、と自らに問うた。彼の答えによれば、臣民が主権者に対してさえも義務を負うかどうかは「服従の言葉にかかっているのではなく、服従の意図——それは服従の目的から判断されるべきである——にかかっている。それ故、我々の服従拒否が主権の設立された目的を破壊する場合には拒否する自由はなく、そうでない場合に拒否する自由がある」²⁴⁾というのである。

このことは、個々人が服従を拒否したとしてもそれは合法的である、と言ってよい場合が少なくとも二つ存在することを示している。第一の場合は、主権者がもはや人々の安全を確保することができないという時に発生する。第二の場合は、主権者が市民社会の目的を確保する能力をもっているとしても、その目的と相容れないことを要求してくる時に発生する。ホッブズが無条件の服従を支持したという見方をそのままは認することはできない。人々は、主権を失った不正な君主に抵抗すべきであるし、更には主権を維持していても、個々の場合に市民社会の目的に向かって努力しようとはしない主権者にも抵抗すべきである。

こうした特徴をもつ故に、ホッブズの考えは《独立宣言》の第三、第四の真理に合致する。すなわち、政府は人々の安全と幸福を確保するために組織されたということ、および政府がそれらを確保しなかったり、あるいは確保しえない場合には、政府を打倒しても合法的であるという真理に合致する。更に安全と幸福という市民社会の目的は、個人主義的観点からすると安全はもちろん生命、自由および幸福の追求という不可譲の権利に等しいから、ホッブズの原理と《独立宣言》の四つの真理とは完全に一致するように思われる。

権利の不可譲性と幸福観に関しては、ホッブズと

ロックとの間に重大な相違がある。先ずホッブズは、権利を譲渡するといっても「すべての権利を譲り渡すことができるというわけではない」²⁵⁾、と述べた。次にホッブズは、生命に加えて別に少なくとももう一つの不可譲の権利が存在すると主張したが、それは退屈しない生活への権利である。譲り渡すことのできる権利とは、個人が自分自身の利益を考えて放棄する権利のことである。従ってもし放棄した結果、退屈な生活がやってくるとしたなら、人は始めからそのような権利を放棄することはできないはずだということになる。ホッブズは、基本的な不可譲の権利を生命(人間の安全)への権利と、彼の説から導き出される特別な種類の安全への権利との二つに的を絞った。そして、ホッブズの安全概念は広い範囲にわたっている。すなわち「ここで安全というのは、単に生命を維持することだけでなく、各人がコモンウェルスに危険や害悪を与えない合法的な勤労によって、自分のものとして獲得しうる生活上の他のあらゆる満足をも意味する」²⁶⁾。生活上の「満足」のなかには、財物の所有だけでなく、精神的喜びも含まれているのである。

これまで統治、市民社会の目的、それに人間の権利に関するロックとホッブズの見解を検討してきた。疑いもなくホッブズは、民主政治の敵対者であり、君主政治の支持者である。けれどもここでの我々の関心は、兩人のうちどちらの見解が《独立宣言》に想定された四つの真理と、より調和するのかという点にある。《独立宣言》は、明らかにどれか特定の統治形態をよしとしているのではない。従ってロックの見解よりもホッブズのそれの方が、その君主政治を選択した理由の故に、より《独立宣言》の真理と調和する。第一の真理に関して言えば、ロックは古典的な思想家の立場に回帰して比例的平等のみをよしとした。従って彼の学説は、たとえ寡頭政治を指向しているとは言えないにしても、ホッブズのそれよりは、より貴族政治を指向していると言えるのである。ホッブズは君主政治をよしとしたが、それは君主の優れた能力を考慮したからではなかった。むしろそれは、人間は誰もそのような優れた能力を身につけてはいないという彼の信念に由来した。人間はすべて能力において平等である。その上、私利に適うと判断することを行うという点において同じ傾向を有している。それ故、こうした人間の本性の諸相を十分に考慮に入れている君主政治が、公共の利益を達成する上で最も大きな可能性をもった統治形態である、とホッブズは論じた。

第二の真理に関しては、ロックの理論が生命、自由および資産という不平等主義的な自然権を主張する理論であるのに対して、ホッブズの学説は明らかに万人にまで拡張される不可譲の権利を主張する学説である。ある人は所有しているが他の人々は所有していない権利がある

とすれば、それは主権への権利のことである。しかしながら、たとえ元来は一人一人がこの権利を所有していたとしても、それは自然権とはいえ、譲り渡すことのできる権利である。従って本人の同意によってのみそれを取り去ることができる、とホッブズは主張したのであった。更に支配者がこの権利を継続して所有することができるかどうかは、万人が生命、自由および幸福の追求の権利を享受するかどうかにかかっている。

また、ホッブズの見解はロックのそれよりもずっと第三の真理に合致する。ホッブズは、統治術とは万人が安全と幸福を獲得することができるような状態を創り出す方法のことだと見なした。彼は、はっきりと幸福には財物の所有を享受するということが以上の意味が含まれると論じ、その上、精神的喜びは財物を手に入れようとあれこれ考えるということに限定されないと主張した。これとは逆にロックは、統治の目的は生命、自由および資産（あるいは保全と安楽と言っても同じことだが）を保障することだけにあると考えた。けれども、保全は万人に用意することができるとしても、安楽は少数の人々だけにしか用意することができないのである。

安楽は、まさに少数の人々だけのために用意されることになる。従って多くの人々は、政府が最低限の生活さえ保障しようとはしない場合にはじめて、政府に抵抗することができるということになる。更にロックは、一部の人が立法府に抵抗する権利を認めてはいない。というのは、人民から構成される政府は常に少数者と多数者の双方の利益を追求するものだ、と彼は想定したからである。両者の利益は相容れないことがあるという可能性は、考慮されなかったのである。

他方ホッブズは、人民から構成される立法府であっても、それが彼等の意に反する利益を追求するという事態が起こりうると予見していた。更に彼は、大多数の人々の命令といえども、それがいつなかったことになるのかを決定する権限の座を各個人に与えることによって、抵抗のためのより広い基礎を用意した。統治の目的と万人の不可譲の権利とは同じものであるから、ホッブズの理論はロックのそれよりもずっと個人主義的、かつ自由主義的である。それ故それは、《独立宣言》の個人主義と自由主義により近いのである。一人による支配であろうと、少数者による支配であろうと、また多数者による支配であろうと、どのような支配に対しても抵抗する権利が存在する。あるいは、その支配が社会の目的を達成しようとしていない場合には、いつでも主権者に抵抗する権利が存在する。こうして、第四の真理に関してもホッブズの理論は、ロックのそれよりも、より《独立宣言》と調和すると言えるのである。

4. 結 論

メイスが『フェデラリスト』を介して証明しようとしているのは、《憲法》が（君主の武力に頼ることなく）社会的不安定の問題を解決すると同時に、人間の権利を保障するような仕方ではホッブズの解決策を採用したという点である。パブリウスの解決策とは、端的に言えば私的利益の追求を利用して公共の利益を達成しようとする憲法体系である。しかしホッブズがこの原理を政府にのみ適用したのに対して、パブリウスはそれを社会にも適用し、それによってホッブズの学説を敷衍し、磨きをかけ、修正を加えたので、ホッブズの学説を「実効的な効用へ転化する」ことができたのであった。そしてこの事実こそ、アメリカの伝統の起源を求めることができるのである。

さて、ホッブズにとっては政治に関する学問が存在したが、パブリウスもまた政治に関する学問が存在すると信じた²⁷⁾。更に彼は、様々な原理——権力の分立、立法上の抑制と均衡、罪過を犯さない限りその職にとどまる判事、そして人民によって選ばれた立法府の代表たち——の有効性を理解していた²⁸⁾。これらの原理に加えて、もう二つの「新しい」原理を援用することによって、パブリウスは社会の正しい秩序づけを達成したと信じた。二つの新しい原理とは、先ず第一に社会の範囲を拡大することであり、それによって第二のもの、つまり諸利益の増殖を助長することである。

公共の利益を達成しつつ社会的安定を確保しようとして、パブリウスが主張した手段は、単にホッブズの手段を再適用し、磨きあげ、敷衍したものにはすぎない。パブリウスは、「民衆による政治の精神と形態とを保持しつつ……党派の危害から公共の利益と私的な権利とを守るものが、我々の探すべき重要な課題となる」²⁹⁾、と断言した。公共の利益と市民の私的な権利とに対する最大の脅威は、多数党派から生まれる。もしその党派が全体の過半数に達しないのなら、その「邪悪な見解」は共和政の原理、すなわち正規の票決によって敗北させられる。しかし他方、ある党派が大多数の人々から構成されている時には、「民衆による統治形態のもとでは、この党派が公共の利益と他の市民の権利のいずれをも、その圧倒的な情念や利益の犠牲にしてしまうことが可能になる」³⁰⁾。

多数者は「社会の特権階級や取るに足りない一部少数の者に基礎を置いているのではなく、社会の大多数の人々に基礎を置いている」³¹⁾から、「民衆による政治の支持者にとっての問題とは、富める者と貧しい者、少数の人々と多数の人々が、例によって例のごとく激しく戦う時に生ずる、あの国内の騒乱をいかにして回避するか、

ということである。かつて民衆による政治においては、政治権力で武装した多数者がこうした騒乱を惹き起こしたのである」³²⁾。

両者の対決を阻止する方法には二通りあって、それらは同時に共和政治の精神および形態と公共の利益とも両立しうるものである。第一の方法は、同一の情念または利益が、大多数の人々のうちに同一時に存在するのを阻止することである。第二の方法は、(同一情念の同時存在を阻止しそこなった場合)この大多数の人々が、「圧政の陰謀」を一致共同して実行するのを不可能にすることである。

権利の観念が私的利益と結合されねばならない。ホッブズは、臣民のうちにではなく、主権者のうちにこれらを結合させるのをよしとしたのであった。他方パブリウスは、主権を有する人民およびその政府を含む「人間の事象の全体」を通じて私的利益と権利を結合させた。私的利益を利用して公共の利益を達成するという手段を、ホッブズよりも広範囲に巧みに適用することによって、パブリウスは人間の本性を変えることなく、統治手段としての恐怖の必要性和その実際的使用とを可能な限り制限したのであった。パブリウスはこう述べた。「私は、この憲法案を採択することが諸君の利益に合致するものであるという見解をはっきりともつに至ったのである。これが諸君の自由、尊厳、そして幸福のための最も確かな方途である、と私は確信している」³³⁾、と。

以上述べてきたことから、次の五つの結論が引き出される。

(一) ホッブズの政治理論は、《独立宣言》の政治理論と調和している。

(二) 社会的 불안定という問題に対してロックが用意した解決策は不十分である。

(三) 《建国の父たち》は、ロックの解決策を退けた。

(四) 彼等は、ホッブズがその問題にくだした定義を採用しただけでなく、ホッブズの解決策をも同様に採用した。

(五) しかも彼等は、きわめて民主政的な社会を創設しつつ、ホッブズの定義と解決策を採用した。

我々がロックの国民か、ホッブズの国民か、そのいずれの名称で呼ばれるべきかということになると、ロック的というよりもホッブズ的と呼べるのは確かである。我々の政治体系の特色は、なんら抑制されない多数者支配にあるのではない。つまり仮りに抑制されるとしても、ロックの言う「社会から独立した意志」によって、具体的に言えば君主の大権によって抑制されるような多数者支配にあるのではない。また、我々の社会の目的は生命、自由および資産の保障に限定されているわけでもない。ロックの言う「資産」は範疇としては狭すぎるのであっ

て、もっと広く包括的な目的、すなわち幸福の一部をなすにすぎないのである。

他方、幸福こそはホッブズの思想の目的である。その思想を実践に移した痕跡は、我々の政治体系や政治的基本文書や政治理念の随所に見てとることができる。それと同時に、君主政治こそ人間の権利と社会的安定の双方を保障しうる唯一の統治形態であるというホッブズの信念は、アメリカ的政治理念ではない。しかしながら、彼が君主政治を支持した理由そのものは——なるほどホッブズからそれを借用して磨きをかけ、敷衍したとはいうものの——、まさにアメリカ的政治理念なのである。

更につけ加えるならば、近代の政治理論の創始者として、あるいは少なくとも自由主義理論の創始者として、ホッブズは我々アメリカの統治形態に対してだけではなく、すべての民衆による政治に対して意義のある貢献をした。彼が、人間の本性は情念によって動かされると規定したこと、すべての人は権利において平等であるとしたこと、そして能力は本質的に平等であるという考えを打ち出したこと、これらは近代の民主政的＝自由主義的理論に先行する必要条件であって、それを彼が前もって正当化したことの意義を否定することができる人はまずいないであろう。

註

- 1) George Mace, Locke, Hobbes, and the Federalist Papers—an Essay on the Genesis of the American Political Heritage (Southern Illinois University Press, 1979).
- 2) ジョン・ジェイ、ジェイムズ・マディソン、アレクサンダー・ハミルトンの三者は、パブリウスというペンネームで八十五篇にのぼる連載論文をニューヨーク市の新聞に発表した。この合作論文集が『フェデラリスト』と呼ばれた。『フェデラリスト』は新しい連邦憲法の擁護論であり、共和主義的統治形態の弁護論であって、憲法理論に関する古典的文書なのである。
- 3) Ibid., p. xii.
- 4) Louis Hartz, The Liberal Tradition in America を見よ。
- 5) Hartz 前掲書、更に Richard Hofstadter, The American Political Tradition を見よ。
- 6) George Mace, The Antidemocratic Character of Judicial Review, 60 Cal. L. Rev. 1148.
- 7) John Locke, Two Treatises of Government, 第九十五節。
- 8) C. B. MacPherson, Natural Rights in Hobbes and

- Locke, in *Political Theory and the Rights of Man*, ed. D.D. Raphael.
- 9) Ibid., p. 1.
- 10) Locke, 第二十五節。
- 11) Ibid., 第五十四節。
- 12) Ibid., 第四十二節。
- 13) 幸福および幸福なという言葉は、『統治論 第二篇』にはたった四回しか出てこない。そしてただの一度も、ロック自身の立場を表すために用いられていない。
- 14) Hobbes, *Leviathan*, 第十三章。
- 15) Ibid., 第二十一章。
- 16) Sterling P. Lamprecht, *Hobbes and Hobbism*, *The American Political Science Review*, 34, no. 1. を見よ。
- 17) 「戦争の本質は、実際の闘争に存するのではなく、闘争への明らかな志向に存するのであり、その期間中は反対の方向に向かうなんらの保証もない。」Hobbes, 第十三章。
- 18) Ibid., 第十三章。
- 19) 例えば J. Roland Pennock, *Hobbes's Confusing Clarity—The Case of Liberty*, *The American Political Science Review*, 54, no. 2 を見よ。
- 20) Hobbes, 第二十章。
- 21) Ibid., 第十四章。
- 22) Ibid., 第三十章。
- 23) Ibid., 第二十一章。
- 24) Ibid., 第二十一章。
- 25) Ibid., 第十四章。「人間には、いかなる言葉やその他の印をもってしても放棄し、または譲渡したとは考えられない若干の権利が存在する。第一に、人は、彼の生命を奪おうとして暴力で襲いかかってくる人々に対して抵抗する権利を放棄することはできない。というのは彼は、自分自身にとって少しでも利益になることを目指したとは考えられないからである。傷害、鎖つなぎ、投獄についても同じことが言えるであろう。……そして最後に、権利のこうした放棄または譲渡が行われる動機および目的は、人間が自分の身柄の安全を確保しようとする点にあり、そのことによって生命と、生きているのが嫌にならないようにしておくための手段とを確実にしようとするのである。」第十四章。
- 26) Ibid., 第三十章。
- 27) *The Federalist*, no. 9.
- 28) Ibid., no. 9.
- 29) Ibid., no. 10.
- 30) Ibid., no. 10.
- 31) Ibid., no. 39.
- 32) Martin Diamond, *The Federalist*, in Leo Strauss et al., *History of Political Philosophy*, p. 589.
- 33) *The Federalist*, no. 1.